



医療政策集中講義 医療を動かす戦略と実践

東京大学公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット 編

A5 頁328 2015年

本体2,800円+税

[ISBN978-4-260-02164-7] 医学書院刊

評者 坂本 すが

日本看護協会会長

そこはハーバード白熱教室さながらの熱気であった。講師も受講生も皆一緒になって議論する。若いナースもいればベテランのドクターもいる。どうやら医療職種だけというわけでもない。日本の大学の一般的な授業風景とは異なる世界がそこにあった。社会人向けの講座であるから、いろいろな人が集まっているのであろうが、年齢も職種も風貌も異なる人々が、何についてこれほど熱い議論を交わしているのだろうか。

東京大学公共政策大学院の医療政策教育・研究ユニットが社会活動として実施する「医療政策実践コミュニティ」。通称H-PACは、患者支援者、政策立案者、医療提供者、メディアの4つの異なる立場の者から構成される。受講生は常にミックスチームを作って、共に政策提言や事業計画書の成果物を作り上げる。

「医療を変えなければならない」「変えるためにアクションを起こさなければならない」「ではどうやって？」さまざまな立場の思いが合わさり気迫すら漂ってくる教室に、私は評者として参加する機会を頂いた。隣に座っていたのは、日本医師会会長の横倉義武先生と厚生労働省の医政局長であった。

ここにはチーム医療の縮図がある。異なる専門性、主義・主張を持つ人々、いわゆるステークホルダーが、違いを認識し合いながら、合意形成を行っていくプロセスを再現する絶好の場である。第一線で活躍する講師陣による20本の集中講義に参加するうち、共通の課題、思いがあることに気付かされる。そして

「今こそ私たちはともに行動しなければならない」と強く心を突き動かされる。

H-PACでは、知識、マネジメント、リーダーシップの3つがそろって初めて変革ができると考えられている。まさにそのとおり。看護の立場から言わせていただくと、これからの看護職はこの3つを兼ね備えるべきと思う。今後、在宅・地域での看護実践がより一層期待される中で、看護職自らが判断し、自律的に活動していかなければならないからだ。

その意味で、特に看護職の皆さんには「Chapter4 成果をもたらすリーダーシップ」を参考にさせていただきたい。嬉しいことに、辻哲夫先生や高本真一先生も自律的な看護職の活動に期待を寄せている。「リーダーシップを発揮しなさい」と言われると重荷に感じる人も多いだろうが、まずは自分の考えを持つことである。現在の社会情勢から、看護職の立ち位置を認識し、「何をなすべきか」考える。自分の考えを確立し、その信念に基づいて行動を起こすことがリーダーシップの第一歩となる。

次は協働である。国の政策をも動かす大きな変革を起こすには、多くの人と力を合わせる必要がある。自分と異なる立場の人といかにコラボレーションするか。そのヒントが本書に隠されている。本書を参考に、一人一人が自分の考えを確立し、協働を生み出す戦略を探ることが「医療を動かす」知の創造につながるだろう。